

## 現代日本社会における親密さとは何か

エマ・ダルトン

結婚前後の友人関係とジェンダー

(ローラ・デルズ)

現代日本社会は「少子化」と「晩婚」の問題に直面している。こうした状況下で、男女はどのように「親密さ」を経験しているのか？ 独身が増加しているなか、人と人との親密な関係を構築する方法も多様化し、友人関係、恋人関係、夫婦関係も変わりつつある。それらの現象においてジェンダー像や男女のあり方はどのように変わってきているのか？

二〇一四年十二月五日に開催された日本研究所、グローバルコミュニケーション研究所共催の講演会では、こうした課題について、西オーストラリア大学のローラ・デルズ氏、筑波大学のクリステイ・コリンズ氏、神田外語大学のエマ・ダルトンの三名の日本研究者が講演を行なった。

ローラ・デルズ (Laura Dals) 氏は現在、西オーストラリア州立大学で准教授を務めている。氏は、一九七九年に西オーストラリア州のパス市で生まれ、高校のころからジェンダーと日本に興味を持ち、西オーストラリア州立大学のアジア研究科で日本語・日本文化を専攻後、博士課程に進んだ。二〇一〇年からはオーストラリア研究会議の助成金 (DECRA) で、日本の家族以外の親しい関係と現代社会の研究プロジェクトを行なった。二〇〇九年に日本の現代フェミニズム運動の研究に基づいた *Feminist Movements in Contemporary Japan* という本を出版した。趣味は食べること、読書、アート、ピラティス。友達と喋ることも大好きとのこと。今回の講演では、デルズ氏より、最近行なっ

たインタビューデータに基づいた分析が紹介された。以下、デールズ氏の言葉をそのまま収録する。

デールズ…まずは、私かなぜこのテーマにたどり着いたのかという説明をしたいと思います。私は、二〇〇九年から二〇一〇年まで日本学術振興会の特別研究員として十八カ月間、大阪大学に在籍しておりまして、その当時行なっていた研究が今の研究のきっかけとなりました。

未婚、離婚、晩婚の女性、シングルマザーなどの、いわゆる「典型的ではない女性」の研究の中から出てきた課題のひとつは、社会的に成人になる過程での大きな目標である「結婚」が、個人の人間関係にどのような影響を与えるのか、そして、いわゆる「婚活」をしている人が何を求めているのか、という問いでした。

もう一つ浮かんできた問いとしては、結婚していない人、しない人、したくない人を、いったい誰が支えているのか、もしくはどのような関係が支えているのかという問いです。未婚化、晩婚化、少子化が進む日本においては、今後ますます一人で行動、生活することが多くなってくるのではないかと思います。私は、二〇〇九年から二〇一〇年末までの日本滞在中、さまざまなシングル女性や離婚した女性の話を聞かせてもらいながら、日本の女性の生き方の変化を調べている

ときに、初めて「おひとりさま」という単語を耳にしました。みなさんは、よくご存知かもしれません。『おひとりさまの老後』（二〇〇七年）という本を出版し、「おひとりさま」という言葉を流行らせた上野千鶴子先生によると、実は結婚は「おひとりさま」への予防ではない、ということです。

「家族」というのは社会的な意味での役割がまだ強いし、日本の男女の大半数が少なくとも一生に一回は結婚します。しかしながら、これから変わって行く社会のなかで、日本に住んでいる人々は、血縁を超えて他のつながりを作る必要性があるのではないかと思います。統計では、現代の未婚化、晩婚化、少子化のありようがはっきり見えます。

・二〇一二年 合計出生率——約一・四人

・二〇一二年 「嫡出でない」出生率——二・二三パーセント  
（つまり結婚が、出生の前提だといえる）

・二〇一二年 平均初婚年齢——女性 二十九歳

（一九八〇年：二十五歳）

——男性 三十歳

（一九八〇年：二十九歳）

・二〇一〇年には、日本の一般世帯の三二・四パーセントが単独世帯となる

こうしたことの背景には、「結婚」という概念がどういうものか、男女にはどのような差が生じているかが、大きく関わっています。

次に、私が行なったインタビュー調査についてお話ししたいと思います。参加者六十四人のうち、女性が四十二人、男性が二十二人。年齢は二十歳から五十九歳の幅広い層となりました。

文化人類学のエスノグラフィでは「参与観察」という研究方法も重視されており、この調査のために、大学のサークル活動や市民の趣味のクラブに少し参加しました。そして、特定のカフェにも通い、「場」という概念を導入して、そのカフェが「場」として常連さんの付き合いにどのような影響を与えているかを検討しています。

「参加者」はインタビューに参加してくれた人で、インタビューは一对一の形もあれば、グループ・ディスカッション（数人の友達同士の集まり）も行なっています。この研究は継続的に行なっていますが、今の段階では六十四人を対象にインタビューを行なっています。その内訳は既婚者が十人、非婚者が四十五人、離婚経験者が七人、未亡人が一人と、事実婚者が一人います。

インタビュー調査の結果として得られた結論は、次の通りです。

結論① 女性の場合、結婚したということで、社会的身分も変わる

「女」から「妻」に変わることは、結婚を通して、それまでに一人分であった家庭的なことが二人分（同居の場合は三人分、四人分となる）になるからでしょう。具体的な生活の変化もあれば、象徴的にも身分が変わって、世間からだけではなく、友達からも「旦那のこと」や「家のこと」に気を使われることになるわけです。結婚していなければ夜でも週末でも遊べるのに、結婚したら実際に自由が利かなくなる、もしくは利かなくなると思われて、どちらにしても結果的に友人との付き合い方が変わってしまうようです。

結論② 親しい人間関係の育成には余裕が必要。「余裕」というのはジェンダーと直面している

女性が結婚をきっかけに退職することの裏には、労働条件の問題があるといえます。また、そこにジェンダーが直面しているともいえます。いわゆる「寿退社」の理由には理屈があると思います。長労働時間、通勤時間を考えると、共働きで生活をするのももちろん難しいところがあります。もう一つは、年収が一〇三万円を超えると経済的に不利になること

が挙げられます。男性より低賃金が多い女性が仕事を辞めたり、パートに変わることは理解しやすいことです。

そうすると、職場でしか築くことができない人間関係も構築できなくなります。一緒に働いて得られる達成感などが「尊厳のある関係」を育てるわけですが、そうした関係を構築することはなかなかできません。職場から離れてもその人と付き合い続けることはもちろん可能ですが、具体的な生活の違いが、会える「余裕」をなくすこともあるようです。

男性の友人関係についても、少し話をさせていただきます。結婚前後を考えると男女に差が出てくるようで、男性は結婚をしたからといって、日々の生活に大きな変化は生じないようです。労働時間がそのまま、もしくは増加することはあっても、早く帰宅するなどということは期待されていません。もちろんそれは男性がみな好きなように遊んでいるというわけではなく、職場が男性に求める「信頼関係」のため、接待などの付き合いが必要だからでしょう。ただし、そうした信頼関係は本来、仕事を通してできるはずのものではないかとも思います。仕事とプライベートの優先順位ができるところに、人間関係の作り方やその可能性も限界もできてくるといえるでしょう。

ワークライフバランスの問題もあるでしょうが、男女の結婚像や役割も重要です。労働条件や賃金の格差という構造的

な問題はまだ根強く残っています。

結論③ 学生、主婦、バイトなどの常勤でない男女の友人関係は、

共有の活動(趣味など)に基づいていることが多い

大学のクラブ活動や趣味を通してできた友人関係は、基本的に一緒に活動しているうちにできるものだそうです。生活が似ているというところから共通の話題や意見ができ、遊ぶ時間や活動も共通点がわりと多くなることは当然です。話が合うということは、親しい関係の基礎の一つなのです。「類は友を呼ぶ」という言葉がありますが、自分の価値観や世界観が似ている人とは仲良くなりやすいといえます。

ただし、生活に共通点があるからといって、必ずしも友達になるとは限りません。

友人関係の継続に必要なのは、生活の共有だけではなく、価値観や世界観、ほかの基本となる物事の共有です。関係性を育てるには、行動や時間の具体的な生活の共通点だけではなく、共感も重要です。

結論④ 長期間の友人関係は人生の時期に応じて「実地、やりか

た、プラクティス」に変化があるにも関わらず、その関係の意味や役割は個人にとってあまり変わらない

人生の時期に応じて、友達の「実地、やりかた」が変わる

ことは珍しくありません。一九八〇年代に上野千鶴子さんは、主婦のネットワークを「女縁」と名付けました。主婦は同じ立場にいて、物理的に助け合うという役割も含めて、つながりとしてほかの欲求を果たしているのです。遙洋子さんも『女ともだち』（二〇〇八年）という本に、「一生続かないかもしれないが、限った時期でもとても重要な存在です」と書いています。やり方やプラクティスが変わるのは生活の余裕のせいでもあり、経験や要求の結果でもあるといえます。

一般的な大学生活は暇な時間が豊富で、一緒に授業を受講したり、一緒に活動することが多く、友達と一日過ごす時間も少なくないものです。しかし、就職して生活が忙しくなると遊べる時間が減ります。そして先に述べたように、特に女性の場合、日々の生活の優先順位が変わり、「友人関係のやりかた」に変化が生じてしまうのは当然です。

### 日本の独身女性の現実と現代メディア像

（クリスティ・コリンズ）

二人目の講演者はクリスティ・コリンズ (Kristie Collins) 氏。コリンズ氏はカナダ出身で、現在、筑波大学人文社会学系准教授を務めており、筑波大学以外でも、フィンランドのアー

ルト大学の客員教授として活躍している。日本とフィンランド以外にも、カナダ、ポーランド、イギリス、トルコなどで、ジェンダー、教養、カナダ文学、異文化コミュニケーションを教えたという幅広い経験もある。二〇一三年に『The Marginalized Majority: Media Representation and Lived Experiences of Single Women』という、独身女性のメディア像の研究に基づいた本を出版。趣味は映画、観劇、旅行とのこと。

コリンズ氏は、日本のテレビドラマの分析をし、独身女性がそこでどのように描かれているのかについて、とても興味深い話をしてくれた。コリンズ氏は以前からイギリスや欧米のメディアにおける独身女性像を研究していたが、二〇〇七年に筑波大学で働き始めてから、日本のドラマにも興味を持つようになったという。

今回の講演会では、『働きマン』（日本テレビ系列）、『Around 40』（TBS系列）、『おひとりさま』（同上）、『結婚しない』（フジテレビ系列）という四つの女性ドラマを分析。また、二〇〇八年に茨城県と千葉県に住む日本人独身女性に行なったインタビューの分析も発表した。

コリンズ氏によれば、二〇一三年に放送された『結婚しない』は、『働きマン』『Around 40』『おひとりさま』のいずれよりも、独身女性像が肯定的に描かれていたという。これは、日本社会の中で独身女性が実際に増えてきており、「結

婚Ⅱ女性の幸せ」という社会的規範が近年変化しつつあることを反映しているのではないかとコリンズ氏はいう。たとえば『結婚しない』のジェンダー像については、下記の三つのポイントが指摘できるという。①大学の講義のシーンを通して、現代日本社会における変わりつつある男女の役割とそれに関する世間（社会からの期待）という社会的問題について直接、視聴者に考えさせた。②女性同士の友情を、恋人関係を含む他の関係より大事にした。③以前のドラマと違った新しい「ハッピーエンド」だった。ここに出てくるジェンダーや結婚に関する価値観は、独身女性が日本社会の中でより生活しやすくなってきていることを物語っているのではないか。

また、コリンズ氏が二〇〇八年に行なったインタビューの分析から導き出されたのは、そうだと感じる女性もいれば、そうでもないと感じる女性もいる事実だという。結婚への世間的義務感がまだ根強く残っているとこもあるようだ。「変化しつつある日本社会のなかで、ジェンダーに関する規範あるいは価値観が少しずつ変わることによって、将来的に独身女性の選択や生き方を受け入れられる社会になることが期待できる」と、コリンズ氏は講演を締めくくった。

※今回の講演では、コリンズ氏が英語で講演を行ない、

神田外語大学で通訳を勉強する学生による同時通訳が

参加者に提供された。さらに日本研究所のマーク・ウィンチェスター先生による逐次通訳もあり、神田外語大学では初めてとなる完全バイリンガルな講演会となった。これからも学生と教職員の言語能力とスキルを活用し、日本人学生のみならず、留学生や一般参加者が興味を持ってくれるような講演会を開催したい。

### オンラインマッチングサイトのジェンダー像

(エマ・ダルトン)

三人目の講演者はエマ・ダルトン (Emma Dalton) が務めた。オーストラリア出身で、現在、神田外語大学日本研究所専任講師として、C P J S (the Certificate Program in Japan Studies) の Gender and Language, The Legal and Political Systems of Japan, Japanese Popular Cultures の授業を担当している。初めて来日したのは一九九五年に高校の交換留学生として兵庫県に行ったときで、それ以来、日本に興味を持ち、二〇一一年にオーストラリアのウーロンゴン大学にて日本の政治とジェンダーを専攻し、博士号を取得した。神田外語大学に着任する以前にはウーロンゴン大学で日本語と社会学を、オークランド大学でアジア研究を、名

古屋市立大学で異文化コミュニケーションを、といったように多岐にわたって科目を教えてきた。研究専門は、日本の政治と政策とジェンダー。この研究に基づいた *Women and Politics in Contemporary Japan* という本を、二〇一五年二月に出版する。最近は、家族や恋愛におけるジェンダーポリティクスについての新しい研究プロジェクトを始めた。趣味は料理、テニス、読書。

本日は、新しい研究プロジェクトの予備的な分析結果を紹介したい。本研究プロジェクトは、日本の「オンラインマッピングサイト」を分析することによって、現代の結婚像がこれらのサイトではどう反映されているのかについて調べるものである。本研究により、日本が直面する少子化時代において、晩婚や非婚を引き起こしうる近代化に寄り添った男女関係のあり方の変化をより深く把握することを目的とする。具体的には、インターネット恋愛、結婚サイトの中の男女像を徹底的に調査したいと考えている。

現代の日本社会は、少子化という深刻な社会文化的问题に直面している。二〇一〇年の出生率は一・三人であり、世界ではドイツ、シンガポール、台湾、香港、韓国の次に低い。人口は高齢化し、一九九〇年代中旬以降、十五歳から六十四

歳までの、いわゆる「生産年齢人口」が減ってきており、将来も減り続ける見込みである。少子化に加え、高齢化の影響で一億二千七百万人という現在の人口は二〇五五年までには九千万人まで減ると見込まれる。この現象は、日本人が積極的に子供を作ろうとしてみなかつた事実から鑑みれば止むを得ず、研究で解決する必要があるとも思われるが、実際には、出産願望自体が薄くなったとは決していえない。やはり、少子化の背景にある晩婚と非婚について検討すべきである。他の国と異なり、日本では出産と結婚は緊密な関係があり、未婚者の出産は珍しい。しかしながら、結婚願望が薄くなったのでは決してなく、現代日本社会には結婚を望みながらも出会いがないために結婚に至らない、という声が多い。つまり、現代日本社会では以前と比べ、結婚、出産までの道筋が円満ではなくなったのである。男女のあり方はどのような時代でもつねに変化するものだが、一九八〇年代からさまざまな面で男女平等社会をめざす法律・政策が制定・実施されたこともあり、それ以降、現在にいたるまでの女性と男性のあり方の変化は特に著しい。現代日本社会を生きる日本人は、ある程度固定観念から開放されたいっぽう、今まで保障されていた、「結婚」に至り「家庭」を築くまでの道のりが見えなくなつた。お見合い、職場結婚という時代がほぼ終り、新しい男女の出会いの方法が現れた。今では結婚の一割だけが

「お見合い結婚」によるものであるという統計が、その現実を反映する。

昨今の新しい男女の出会いの方法には、「合コン」「街コン」に加え、インターネット上における「恋愛・結婚サービス」がある。日本のマスメディアでは、出会い系サイトは「危ない」「怖い」というメッセージがよく報道されているにもかかわらず、いわゆる「出会い系サイト」とひと味違った婚活をしている人を対象とする「恋愛マッチングサイト」を利用している人は、確実に増えているのである。

今回分析するサイトは次の五つ。

- エキサイト恋愛結婚
- ブライダルネット (Bridalnet)
- Youbride
- 楽天オーネット (Ornet)
- Yahoo! お見合い

宣伝、ウェブサイトを、成立したカップルの「ストーリー」といった一般市民でも閲覧できる情報を分析した。予備的分析の結果として、次の二つのことがいえる。

① オンラインマッチングサイトは「典型的な男女像」を強

調する。特に夫婦の男女役割分担が強く謳われており、そこからは「大黒柱」という典型的な男性像がはっきり浮かんでくる。例えば「Youbride」以外のサイトでは、いずれも登録する際に、その利用条件として男性のみに「収入」の条件を付している。具体的には男性に「定職」や「定収入」がないと入会できないという条件である。

②また、男女が結婚生活で求めるものが違うということも、サイトに反映されている。男性には結婚したら「規則正しい生活」が送れるようになるという期待があるらしいっぽうで、女性は結婚したら「幸せになる」というイメージを持っていることが浮かんでくる。また、男性は奥さんに、特に食事の面で頼ることになるようである。「理想的な奥さん」は料理が好きだ、というイメージは特に「成立したカップルのストーリー」にもはっきり明記されている。

ただし、以上の分析結果は、あくまでもこれらのオンラインマッチングサイトの価値観に基づいているものである。

インターネットを通して結婚相手を探している人々は世界各国で増加している。この現象からは、その社会と文化における男女関係、男女のあり方について、いろいろなことが見えてくる。一九九〇年代にインターネットが個人と個人を繋ぐコミュニケーションの道具として使われるようになった時



点からオンライン恋愛時代に突入した欧米と、最近インターネットを通してお見合いや結婚活動をするインドという国々についての学術的な研究・分析は豊富にあり、興味深い。本研究ではそうした状況下での「日本」の存在を明らかにしたいと考えている。さらに、少子化時代の中で恋人あるいは結婚相手を探す人々の苦勞が明らかになることも期待する。そして、マクロな面からは、現代社会の男女のあり方の変化と存続が浮き彫りになるだろう。男女は恋愛・結婚の面で何を求めているのか、そして異性に何を期待しているのかをより詳しく深く把握することで、日本の現代社会・文化の理解が深まる。このような問題を研究することによって、ジェンダー、恋愛、結婚、親密さに関する社会における規範の変化がさらに浮き彫りなることを願っている。

### 三人の講演のまとめ

三人の研究者の専門分野についての話はいずれも示唆に富むもので、非常に有意義な講演会になった。恋愛、ジェンダー、メディアなどという身近な話題だったこともあり、会場には多くの参加者が集まった。本学の学生・教職員のみならず、外部からの参加者も多数見受けられ、本学日本研究所とグロー

バルココミュニケーション研究所にとっても大成功といえるものとなった。次の講演会にも、多くの参加者が来場してくれることを願う次第である。